

日本ルイ・アームストロング協会設立 **21** 周年パーティー“感謝の集い”

デキシーからモダンまでジャズと豪華なお料理と…

7月12日、上野・精養軒に270人!“天皇の料理番”ディナーとドリンク飲み放題を満喫

日本ルイ・アームストロング協会(WJF)の設立21周年を祝うパーティーと“感謝の集い”が、梅雨の合間にカラリと晴れわたった7月12日、テレビドラマ“天皇の料理番”でもすっかり有名になった東京・上野の『精養軒』で開催された。参加者は予想を大幅に上回るざっと270人! WJF会員、支援者、ミュージシャン、評論家らJAZZ関係者のみなさんはもとより、一般のジャズファンまで加わって、まさに“サッチモの夏を偲ぶ”にふさわしい素晴らしい、1日となった。(小泉良夫)

お祝いの生花、ご祝辞、祝電も次々と到着 夫妻の半生を彩った名誉市民証なども展示

昨年20周年当時は、外山喜雄・恵子夫妻も、スタッフも、もう超忙しくて、とても祝賀会を開催する態勢にはなかった。それでもこの節目の年に…という声に後押しされて、外山夫妻も一念発起、1年遅れも何のその、素晴らしい“感謝の集い”を開催する運びとなった。何ごとにも超几帳面な、外山恵子さん(もちろん喜雄さんもね)などは、関係者との連絡、会の進行、記



たが次々と紹介されていく。そして会員であり、BS朝日放送のプロデューサー、柿崎拓哉さんらの手で編集された2

1年のWJFの歩みの映像が大型プロジェクターに映し出されている。

恵子さん、「皆さまのおかげで筋書きのない物語のように、いろいろなことが次々と続きました。資金もなく、皆さまの年会費だけが頼りでやってきました。本当に奇跡が起こったようです」。途中、感極まって声を詰まらせる恵子さん。喜雄さんもツーンと来たのか、鼻を押さえて目を潤ませる。



念品の作成・配布などで、もう疲労困憊、七転八倒! 「大丈夫かなあ」という周囲の心配もなんのその…午後1時過ぎには、夫妻ともどもスタッフが集合、準備に入った。

場内入り口近くには、外山夫妻の著作物、CD、ニューオリンズ名誉市民証、外務大臣や国家戦略大臣からの表彰状、夫妻の活躍を伝えるニューオリンズ・タイムズペキューン紙の1面記事などもズラリと展示された。

午後4時半開場、生花の贈り物がずらりと並ぶ中、みなさん列をなして会場に入り、ウェルカム・ドリンクがスタートした。WJF会報「ワンダフルワールド通信」編集長、山口義憲さんの(写真左上)司会で5時開演、まずは外山夫妻のご挨拶(上の中央)。1994年の発足以来、支援の手を差しのべてくれているみなさまが



前夜、夢の中に“パパ”サッチモが現れて… 祝辞にたつ瀬川昌久さんにメッセージを託す

ご祝辞も沢山いただいていたが、代表してジャズ評論家、瀬川昌久さん(写真左)がステージに上がる。「一番始めのご挨拶ということで何を…と考えていたところ、昨夜、夢の中に“パパ”ルイ・アームストロングが出てきて、お前はわしの歳に一番近いのだから、明日、わしの名前を冠した協会の集いに行って、わしに代わってみんなにわしのお祝いのメッセージを伝えてくれといわれたんです」。これがまた素晴らしい、感動的なメッセージだった。

「わしは、外山喜雄という男を良く覚えている。わしが日本へ行ったとき、楽屋で休んでいると、若い男が入ってきて握手をすると、テーブルの上に置いておいたわしのトランペットを黙って吹きやがった。面白い男だと思っていたら、わしの故郷ニューオリンズで数年ジャズの勉

強をしたあと、わしのホットセブンと似たようなバンドを作りおった。わしよりもうまくやっている。愛と平和を世界中に広げるというわしの理想も受け継いで、ニューオリンズとの交流を深めて今日まできている。聞くとところによると、71歳でわしよりも長生きしておる。奥さんはピアニストで2人とも仲良くやっている。結構なことだ。わしも昔、ピアニストと一緒にだったが…。そんなところで目を覚ましたら、枕元にサッチモの一番新しい関連本が置いてあったという。会場から爆笑と、やんやの喝采。

中村宏さんの乾杯で“天皇のディナー”に入る “BGM”は豪華なラグタイムバンドの生演奏！

WJF会員代表(いまやもう名誉会長的な存在)の中村宏さん(ジャズ評論家、医学博士)が乾杯の音頭(写真①)をとって歓談とお食事に入る。みなさん“天皇のディナー”



(!?)に舌鼓。やはり、これは素晴らしいお料理だったのではありませんか。この

間、特別編成のラグタイムバンドがステージに上がって、セイントズのメンバーを中心に関泰子さん(vln)、後藤千香さん(p)が加わっての演奏(写真②)。ディナーの“BGM”ということだったが、生演奏の素晴らしいジャズ・サウンドが流れる。曲目は、「サッチモが小さいときに聴いた音楽を再現してはどうか?」という外山さんのアイデアで、『オリジナル・ラグ』(1899=スコット・ジョブリン)、『エンターテイナー』(1902=1973年アカデミー賞)、『メイプルリーフ・ラグ』(1899年)が



選ばれた。BGMどころか、食事の手を休めて聴き惚れる方も多かったほどの熱演。次いで今年とはなくなってしまったが、「サッチモ祭」出演バンド有志の皆さま、デキシードランカーズ(写真③)の『サムデイ・ユール・ビー・ソーリー』と工学院、明治、慶応義塾、早稲田各大学OBの皆さん他、ピックアップ・メンバーによる『ビル・ベイリー、おうちに帰ってこないか』の演奏(写真④)。

あのヘレン・メルルさんから素敵なおメッセージ 「ルイは、私たちみんなの父親なのです」と

ご祝辞もメールなどで沢山いただいた。アメリカ大使館、国際交流基金、ニューオリンズの皆さま…主だったご祝辞は印刷してみなさまのテ



ブルにお配りしたが、これら心温まるご祝辞の中からニューヨーク

在住の歌手、あのヘレン・

メルルさんからのご祝辞が、中村宏ご夫妻ともども会場にお出でになった友人のキャサリン・ホワットレイさん(来日中のNYコロンビア大学生)が英語で代読

(写真上)、外山さんが通訳した。

＜ジャズ界の仲間全員から、私たちの音楽と国際親善のために素晴らしい仕事されたことに感謝いたします。貧しい子供たちに楽器を贈

り、音楽への愛とルイ・アームストロングに捧げる気持ちで、友情をはぐくんで下さいました。ルイは、私たちみんなの父親なのです！＞といった素晴らしい内容。

石井一さんの「サッチモの旅」のエピソード 「俺はセイントズのマネージャーだ」も大受け

ここで、もうお一方、衆参両院議員、国土庁長官など要職を歴任された石井一さん(ページ上段中央の写真、)が、お忙しい中を駆けつけてきてご祝辞を下された。石井さんのことはもう何度もこの会報でご紹介させていただいていますので、あらかた省略させていただきますが、この日のご祝辞も大受けだった。

石井さんは、昨年の「サッチモの旅」に同行なされて、エピソードも多数残されているが、これも秀逸。現地ニューオリンズのサッチモ・サマーフェスト最前列のステージにぴったり寄り添ってセインツの演奏を聴き入っていた石井さんに、係りの黒人女性が近づいて尋ねた。「あなたはどんな方なのですか?」と。

石井さん、「俺は彼らのマネージャーだ! って言ったんです。そういわないと追い出されるからね」。その彼女に、石井さんはたっぷり吹き込んだ。「どうだ、アームストロングとほとんど一緒だろうが…。彼は日本の誇りなんだ」と。そして、最後に「いまの30代、40代はだめだなあ。60、70、80代が活躍している。前田憲男さんをご覧ください! 」と。その前田さん、あとで素晴らしい演奏をきかせてくれた。

**早稲田ニューオリも熱演若いパワーを発散!
デキシールオールスターズ1、2も次々と熱演**

WJFと歩んで来た参加者のみなさん、お年寄りがめだ

つのですが、この方々は若い! 外山夫妻の出身母体、早稲田大学ニューオリンズジャズクラブの部員のみなさん。お祝いに駆けつけ、若々しい演奏を披露してくれました(写真①)。お手伝いまで…。マネージャーの都築太一さんと「今回は特に選りすぐった」という3、4年生バンド・メンバー7人。外山夫妻を先頭に客席背後からブラスバンド『Just a little while to stay here』で登場して会場をパレードした後、『ダイナ』を披露。彼らのように伝統的なジャズ支える若者は、世界的にも稀有に近いそうだ。



次いで、デキシールランド・オールスターズ1…中川喜弘(tp)、鈴木孝二(cl)、田辺信男(ts)、松本耕司(tb)、藤崎羊一(b)、山本勇

(ds)、後藤千香(p)のみなさんによる『ロイヤル・ガーデン・ブルース』。デキシール



ランド・オールスターズ2…下間哲(tp)、広津誠(cl)、田辺信男(ts)、粉川忠範(tb)、藤崎



羊一(b)、山本勇(ds)、外山恵子(p)のみなさんによる『ストラッティン・ウィズ・サム・

バーベキュー』。さらに外山喜雄とデキシールセインツ…外山喜雄

(tp,vo)・恵子(p,bj)、鈴木孝二・

広津誠(cl)、サバオ渡辺(ds)のみなさんによる『この素晴らしき世界』『世界は日の出を待っている』『ウェストエンド・ブルース』…ここにモダンジャズ界のベテランで、ニューオリ

ンズの街と音楽にどっぷりトリコになっている中村誠一(ss,ts)が特別出演し、シドニー・ベッシュの名曲『ベッシュ

ズ・ファンタジー』を熱演。さらに、お忙しい中駆けつけてく

日本ルイ・アームストロング協会設立21周年記念
～感謝の集い～



れた日本ジャズ界の重鎮、前田憲男(p)さんも大拍手で迎えられ、なんと『モーニン』。さらに、恵子さんがバンジョー演奏を披露したが、前田さんは、「滅多にやったことがないんだが…」と、再び『世界は日の出を待っている』を超がつくほどの熱演。そして、やはりサッチモと言えばトランペットのバトルがほしいところ、中川、下間、外山の3ペットが、『明るい表通りで』で火花を散らせた。



中村誠一さん(上)と前田憲男さん(右)

“感謝の集い”とはいえ、熱の入ったコンサートで出演者の数も多く、ちょっぴり演奏したりなかったというみなさんも少なくなかったかも…。フィナーレが近づいて来て『バーボンストリート・パレード』の演奏には、あふれんばかりの演奏者がステージに上り、さらにはステージを下りて傘を手にした大勢のお客さんを従えてのセカンドラインパレードが場内を巡る。あの顔、この顔…お馴染みのみなさんも総出演！

外山夫妻を称え爆笑誘った佐藤修さんの中締め フィナーレはセカンドラインを従え『聖者の行進』

そんな熱気の中に、いよいよ中締めの佐藤修さん(写真右=ポーニーキャニオン社長、レコード協会会長など要職を歴任)が呼ばれてステージに駆け上る。日本クラブユースサッカー連盟の会長を務めたこともあるスポーツマン(大学時代はゴールキーパー、国体にも出ている！)。外山夫妻を称えて元気にこやかに締めくくりの挨拶。



「サッチモは69歳で亡くなったが、晩年は歌ばかりでトランペットは吹いていません。それにくらべ外山さんは71歳。まだまだ元気にトランペットを吹いている。たいしたもの。ニュー



オリンズに楽器を送り届けて21年。カトリナの前からです。こうしてみなさんが集まってこれ、支援して下さっているのは、ひとえに外山夫妻の人徳に寄るところが多いんです。何しろお2人は、人の悪口を言ったこと

がない。本当にそう思っているのかどうか…(爆笑)。そして、この中心になる人物がいて、司会の山口さんを始め、スタッフのみなさんが献身的に支えているのです。では、皆さまのご健勝をお祈りして…これからもご支援をよろしくお願い致します」



ろしくお願い致します」

フィナーレは『聖者の行進』。聖者(セインツ)に加わって、ここでもみなさん、セカンドラインとなって会場を巡った(写真下中央)。午後8時過ぎ、お開きとなって、エレ

ベーターホールの前では、別れを惜しむみなさんが声を掛け合い、手を握りあう。仙台、宇都宮、長野、四日市、大阪、芦屋、神戸…など遠方から駆けつけてくれた方々も。なかには、外山さんの手を握って涙ぐんでいた方もおりました。みなさん、またの再会を楽しみにしていますよ。この3階の会場から一つ上がった4階屋上は、なんと午後10時まで営業のビアホール。ここで“打ち上げ”を楽しむグループもあった。

大好評だったサッチモの小粋な日本手ぬぐい 九段LC会長、松村善一さんが500枚も寄贈

一つ特筆させていただくものに、この日のお土産があり

ます。サッチモ・コースター、サッチモ缶バッジ、サッチモ・メモ帳外山夫妻撮影の8枚組ニューオリンズ写真集絵はがきなどに加えて、サッチモをあしらった江戸情緒豊かで小粋な日本手ぬぐい(写真下)。東京・九段ライオンズクラブ会長、松村善一さんが、地元の職人さんに頼んで500枚も作り、寄付していただいたもの。外山夫妻は大喜びで、サッチモの旅のさい、ニューオリ

ンズやニューヨークのみなさんにもお土産として持参するという。

どこをとっても非の打ち所のない素晴らしい“21年感謝の集い”だった。皆さまご来場あり

がとうございました。

